26　次の文章を読んで、後の問に答えよ。但し設問の関係で送り仮名を省いた部分がある。　　　　　　　　　　　　　　〈名古屋大〉二〇二二年度出題

　侍　従　浜　松　　㆓ 好　　癖㆒。物　 　一㆑ 、古　　之　ａ自㆓ 四　方㆒ 　。　　 数　百　㆒。 １ 侯 ㆒、 ㆑ 、 　題　㆒。 而　 、大　小　無　慮　百　四　十　余　品。皆　㆓ 数　百　年　　物㆒。㆓ 年　号㆒、㆓ 標　章㆒、㆓ 寺　観　堂　宇　之　　㆒、古　色　　 ㆑ 也。　 古　今　之　沿　　㆓ 時　俗　之　好　尚㆒、㆔ 　 　一　㆒ ｂ而 已。坦　 　㆓ 一　定　之　　㆒。 　而　貴 　㆒。珠　玉　金　　 　貴 　㆒。 凶　年　　 ｃ不㆑ 如㆓ 一　握　之　。２ 貴 ㆒ 。敗　瓦　　　人　皆　軽 　㆒。 ㆑ 　 古　今　之　沿　㆒、 時　俗　之　好　㆒、　 軽　㆒ 焉。３ ㆓ 一㆑ 也。君 相 之 人 ㆒、 。　㆑ 所㆑ 　㆑ 所㆑ ４苟 能 器 使 之㆒、無㆓ 不㆑ 可㆑ 使 之 人㆒。今　　 古　㆒、　　 、　　 　者　㆑ 　矣。 又　 、侯　之　 古　㆒、 古　㆒、不㆑ 故　㆒、 ㆓ 故　㆒、　 　㆓ 　好　　癖　㆒。 　　譜　之　所㆑ 自、　 　一㆑ 　乎。

（佐藤一斎『愛日楼全集』「古瓦譜引」による）

【注】　○浜松侯――水野忠邦（一七九四～一八五一）。将軍家慶を補佐して天保の改革を行った。

　　　　○湊至――集まってくる。

　　　　○印――拓本をとる。

　　　　○題言――はしがき。

　　　　○坦――佐藤一斎（一七七二～一八五九）。儒者。坦はその名。

　　　　○攤――ひろげる。

　　　　○無慮――およそ。

　　　　○標章――（瓦の）文様。

　　　　○款識――彫りつけた文字。

　　　　○藹然――盛んなさま。

　　　　○可掬――すくいとれるほど多くある。

　　　　○敗瓦爛甍――こわれた瓦。

　　　　○器使――才能に応じて用いる。

　　　　○故旧――古い友人。

問１　波線部ａ「自」ｂ「而已」ｃ「不㆑如」の読みを、それぞれひらがなで記せ。

問２　傍線部１「頃者侯自揀㆓其最佳者㆒、印以為㆑譜」を、現代語訳せよ。

問３　傍線部２「豈必謂㆓貴重㆒乎」は、筆者はなぜそのように言っているのか。説明せよ。

問４　傍線部３「然不㆓独在㆒㆑物也。君相之用㆓人材㆒、亦或然」とはどういうことか。説明せよ。

問５　傍線部４「苟能器㆓㆐ 使之㆒、無㆓不㆑可㆑使之人㆒」を、書き下し文にせよ。

◎問６　「古瓦」を愛好することが、「志を喪ふ」ことにならないのはなぜか。本文の主旨を踏まえて一五〇字以内（句読点も字数に含める）で述べよ。

【解答と採点基準】

問１　ａ＝より　　ｂ＝のみ　　ｃ＝しかず

問２　Ａ最近、浜松侯はＢ数百の古い瓦の中で最もよいものを自分で選び、Ｃ拓本をとって系統立ててまとめた冊子とし

それぞれ同意可。

Ａ＝２〔「浜松侯」は「水野忠邦侯」なども可。〕

Ｂ＝４

Ｃ＝４〔「系統立ててまとめた冊子とし」は「冊子に編集し」なども可。〕

問３　Ａ宝玉や金貨は平時には価値のあるものだが、Ｂ穀物が不作のときにはわずかな粟にも及ばないものであるから。

訳が「～に及ばない」の意になっていないものは全体０。

Ａ＝５〔同意可。「平時」に類する語がないものは減点２。〕

Ｂ＝５〔同意可。「穀物が不作のとき」に類する語がないものは減点２。文末が「～から。」となっていないものは減点１。〕

問４　Ａ古い、こわれた瓦からＢこれまでのものごとの推移や時代に応じた流行を観察することは、Ｃ宰相が時流に応じた人材の登用を考える際にもあてはまるということ。

それぞれ同意可。

Ａ＝２〔「古い、こわれた瓦」は「がらくた同然の瓦」なども可。〕

Ｂ＝４〔「これまでのものごとの推移」に類する語がないものは減点２。「時代に応じた流行」に類する語がないものは減点２。〕

Ｃ＝４

問５　苟も能く之を器使すれば、使ふべからざるの人無し。

問６　Ａがらくたにしか見えない古瓦をよく観察することで、時代の移り変わりや好みがわかる。Ｂ人材も同じで、ある時には長所であることが別の時には短所となり、またその逆もあり得る。Ｃ改革を進めるにあたり人材を求めた浜松侯にとって、Ｄ古瓦を愛好することは趣味ではなくＥ人材を見抜く目を養う一つの手立てだったと考えられるから。（150字）

それぞれ同意可。

Ａ＝２／Ｂ＝２／Ｃ＝２／Ｄ＝１

Ｅ＝３〔文末が「～から。」となっていないものは減点１。〕

【書き下し文】

にのり。のむにり、の問１ａよりす。したをぬ。侯ら其のもなるをび、しててとし、にをむ。きてをるに、百。数百の物たり。有り、有り、の有り、たりてすべきなり。其れのとのとにいて、以て其のをふにる問１ｂのみ。坦てへらく、物にのし。にりて之を貴賤す。はをげて之をす。れどもにはのに問１ｃかず。にずしも貴重とはんやと。皆之をす。而れどもを以て古今の沿革をへ、時俗の好尚を徴むれば、ち軽賤すべきにず。してり物のみにらざるなり。のをふるも、亦たいは然り。にずる所有り、尺にずる所有り。問５もく之をすれば、ふべからざるの人無し。今侯の古瓦に於ける、猶ほつてざれば、則ち其れ人に於けるもるべし。そも之をせば、侯のをび、古人をび、をてず、を棄てざるは、亦たに必ず其の好古のに在るべし。然らば則ちの譜のる所、豈に物をびをふと之を視るべけんや。

【現代語訳】

　将軍家慶の侍従、浜松侯には古物を好む性質があった。物はその物を好む（人の）所に集まり、古瓦がさまざまなところから集まってきた。思うに、なんと数百片（もの数）を重ねたことであろう。問２最近、浜松侯は数百の古い瓦の中で最もよいものを自分で選び、拓本をとって系統立ててまとめた冊子とし、私にはしがきを（書くよう）求めた。（その冊子を）ひろげて系統立てられた古瓦の拓本を眺めると、大小およそ百四十あまりのもの（が並んでいる）。みな数百年以上前のものである。年号、瓦の文様（に加えて）、寺院の屋根瓦に彫りつけた文字も記されており、古びた趣きに満ちあふれ（たものが）、手ですくい取れそうなほど多くある。なるほど、昔から今までの沿革と時代に応じた好みについて、その一部分をうかがい見るのに十分に足りるだけ（の量）である。私は、昔、思ったことがある、物の値には定まった高い安いはない。時期によって物の値を高くしたり安くしたりする。宝玉や金貨は世間がみなそれを貴重（なものだ）としている。しかし、（穀物が）不作で飢饉の年には（宝玉や金貨は）わずかな粟にも及ばない。どうして必ずしも（宝玉や金貨が）貴重（である）といえようか、いやいえないだろう。こわれた瓦は、人々は皆、こういったものを軽く扱う。しかし、こういったものによって昔から今までの移り変わりを考え、時代の好みを探し求めるなら、それらは軽く扱うべきではない。そして、（それは）ただ物（の扱い）だけではないのだ。君主や宰相が人材を登用するときにも、やはり場合によってはそうなのである。短所（と思われたところ）に長所があり、長所（と思われたところ）に短所がある。仮に、人々を才能に応じて用いる（ことができた）なら、登用することができない人はいない。今、浜松侯が古瓦（の収集）において、やはり（こわれた瓦をも）捨てないのであれば、そのときには（浜松侯のその姿勢は）人に対する場合もこれは同じだとわかるだろう。そもそも、さらにこれを推し進めれば、浜松侯が昔の道を尊重し、昔の人を尊敬し、年老いた人を捨てず、古い友人を捨てないのは、やはりきっとその古物を好む性質の中に（理由が）あるのだろう。そうであるなら、その時には、この冊子の成立が、どうして（浜松侯が）物をもてあそび、志を失った（結果として成立した）ものだと見なすことができようか、いやできないだろう。